

## 健康づくり・スポーツ推進特別委員会行政視察概要

1 視察月日 令和4年7月21日（木）～7月22日（金）

2 視察都市及び視察事項

(1) 福岡県北九州市

ミクニワールドスタジアム北九州における健康づくりの取組について

(2) 広島県広島市

健康づくりセンターを中心とした健康づくりの啓発について

3 視察委員

委員 久保和弘  
同 高橋正治

## 視察概要

### 1 視察先

福岡県北九州市

### 2 視察月日

7月21日（木）

### 3 対応者

株式会社日本施設協会北九州スタジアム副施設長 （挨拶）

市民文化スポーツ局スポーツ部スポーツ施設担当課長 （説明）

市民文化スポーツ局スポーツ部スポーツ施設担当係長 （説明）

### 4 視察内容

#### （1）ミクニワールドスタジアム北九州における健康づくりの取組について

##### ア スタジアム概要

平成29年1月に竣工し、1万5300名の収容人数を誇る。設計・建設費は、約100億円である。

正式名称は北九州スタジアムであるが、令和2年から3年間の契約でネーミングライツを導入しており、命名権を取得している株式会社ミクニに由来し、ミクニワールドスタジアム北九州（ミクスタ）が名称となっている。日本プロサッカーリーグに加盟するギラヴァンツ北九州のホームスタジアムである。

##### イ スタジアム整備のポイント

小倉駅から徒歩7分という抜群の利便性と、関門海峡を臨む海に隣接した絶好のロケーションを生かし、多くの人々が集い、にぎわいを生む「海ちか・街なか」のスタジアムである。

客席最前列とタッチラインとの距離が8メートルであり、ピッチとの高低差約65センチメートルの臨場感あふれるダイナミックなスタジアムとなっている。環境への配慮については、太陽光発電や雨水利用、高効率LEDナイター照明等を利用した環境未来都市にふさわしいエコスタジアムであることなどが特徴である。

##### ウ スポーツ利用の事例

ギラヴァンツ北九州の試合や、ラグビートップリーグなど、様々なスポーツへの利用をはじめ、ロックフェスティバルや花火大会のような大規模イベントでの利活用の実績がある。

## エ 健康づくりの取組

市民向けの健康教室として、様々な取組を実施

- ・満60歳以上の方を対象としたシニア健康体操教室
  - ・プロスポーツ仕様の天然芝を活用し、小学生以下の子供と保護者を対象とした、親子天然芝フィールド体操
  - ・走るのが苦手な小学生低学年等を対象とした、運動会必勝塾や足形測定
  - ・満18歳以上を対象とした、気楽に行えるウォーキング教室
  - ・スポーツが苦手な人でも参加しやすい、北欧フィンランドのノルディックウォーキング教室
- スタジアムの特性を活かしたこのような取組によって市民の健康づくりに寄与している。

## オ 質疑概要

Q 健康づくりの参加者は、どのような地域の人が多いのか。近場の小倉北区からの人が多いのか。

A 近距離の人も多いが、市内遠方からも多くの参加実績があり、公共交通機関や自家用車などを利用して来場している。

Q 現在は感染症流行の真ただ中であるが、イベントの開催状況や参加実績への影響はあるのか。

A 昨年までは、10回コースと12回コースで春と秋の年2回の開催であったが、利用者の要望を受け、今年度からは回数を増やす形で実施している。具体的には、四半期の開催として年間40回開催にするようにした。

また、ステイホーム中は、スポンサーであるミズノ株式会社との連携で、自宅で実施可能な取組も新たに考案した。

Q 市民利用の催しについては、指定管理者が自主事業として独自に内容に工夫を凝らして行っているのか。

A 自主事業として事業収入にもつなげるために、平成29年のスタジアム運用以来から、様々な工夫を凝らして行ってきた。ミズノ株式会社と連携しながらの実績も多い。

Q スタジアム来場者の駐車場利用はどのようになっているのか

A 近隣地区での駐車場の活用はもとより、小倉駅から徒歩圏内でもあることから、公共交通機関の利用においても優れたロケーションであることが当該施設の大きな利点となっている。

Q 災害時におけるスタジアムの活用について、どのような特徴が

あるのか。

A 海に隣接しているといった理由により、地震時は地域の予定避難所になっていない。有事の際におけるスタジアム来場者の避難については、避難計画が組まれている。

## (2) 委員所見

近年の急速な高齢社会が進展する時代において、いかに健康で健やかに年齢を重ねていくかということは重要な視点である。また、それを若い世代の時から心がけて実践していく方途を模索することは、時代が求めている事項の一つであると考えます。

今回の視察では、交通至便かつロケーションに恵まれたスタジアムというハードを活用して、幼少期から高齢者までの幅広い世代を対象とした様々なソフト面での健康づくりの取組が聴取できた。

特に、指定管理者と行政の連携のもとで積極的に取り組んでいる施策は、持続可能な事業の在り方としても、有用な取組であると思慮する。

人口減少に向かう本市においても、いかに健康で健やかに年齢を重ねていくかということは、社会保障や政策の上でも、大切な取組となっていく。

本市においても、人口減少社会に転じるにあたり、青少年の時代から日常的に健康づくりに取り組む必要がある。健康長寿社会の実現に向けて、今回の視察をその参考の一例として生かしていきたい。



(スタジアムにて事業概要を聴取)



(グラウンドにて施設概要を聴取)

## 視察概要

### 1 視察先

広島県広島市

### 2 視察月日

7月22日（金）

### 3 対応者

健康づくりセンター健康科学館館長（挨拶・説明）

健康づくりセンター健康科学館教育課長（挨拶）

### 4 視察内容

#### （1）健康づくりセンターを中心とした健康づくりの啓発について

##### ア 施設の概要

平成元年9月に開館。鉄筋コンクリート造6階建ての5階部分に施設がある。延床面積は約2331平方メートルであり、展示面積は1350平方メートルとなっている。

施設の大まかな造りとして、展示ホール、研修・会議室、健康ライブラリー、集いの広場などがある。

##### イ 健康教育事業と健康づくりセンター健康科学館の役割

健康教育事業は、健康に関する科学知識の普及啓発を図ることを目的としている。子供から高齢者までの各年齢層に応じた様々な健康問題について、最新情報を分かりやすく提供することにより、日常の健康管理について正しい知識の普及を目指すものである。

当該施設では、人間の体の仕組み、病気と健康、歯の健康等について子供から大人まで興味を持って学習できる拡大模型・映像・グラフィック等の展示を通して普及啓発をしている。

##### ウ 健康づくりセンター科学館の展示

「幸せな人生を送るためには健康はかけがえのない宝物である。好ましい生活習慣を守って豊かな人生を送りましょう。」というコンセプトのもと、「生きるって何だろう？」、「病気ってなんだろう？」、「老いるって何だろう？」、「健康って何だろう？」、「原爆放射線と健康」、「健康プレイ」の6つのゾーンから構成されている。

小さな子供が直接触れ合い、体験しながら楽しめるように様々な

工夫を凝らしており、令和4年7月23日からは、子供が大好きなテーマの一つである「うんち」をテーマにした展示やゲームを行う予定である。

#### エ 健康教育機能と子育て支援機能

健康教育機能としては、健康に関する情報を集めて、人間の体の仕組み、病気と健康、歯の健康等について、誰でも分かりやすく展示するほか、健康をテーマにした研修や会議、セミナー、子供教室などを実施している。主には、展示室の運営、健康に関する教育研修の実施、ヘルスサポーターに対する研修会の実施、広報、展示物や資料の貸出しを行っている。

また、子育て支援機能としては、少子化対策が急務となり、子育て支援に対する市民のニーズも高まってきたことから、当該施設においても、子育て中の親子が自由に集える「集い広場」や、地域における育児相互援助活動を行う「ファミリー・サポート・センター」を設置し、乳幼児から高齢者まで、生涯を通じての健康意識の醸成を図っている。

#### オ 施設の利用者数

令和2年度は計7518人であり、令和3年度は計7790人であった。

令和元年度の実績と比較すると、令和元年度は5万3807名であったことから、感染症の影響を大きく受けたと考えられる。

#### カ 質疑概要

Q 利用者数について、コロナ禍においては大きく利用者が減少したと聞いたが、当該施設の開館状況はどのようなものであったのか。

A 令和3年度の開館日数は183日であった。令和3年5月16日から6月20日、8月20日から9月30日、令和4年1月9日から3月6日までの期間において臨時休館としており、利用者数に大きく影響したと考えられる。

Q コロナ禍での1日あたりの平均利用者数は42名とのことであるが、どのような年齢層が多く来館されているのか。

A コロナ以前の1日あたりの平均利用者数は約180名であった。年齢層としては、30代から40代の方と子供という組み合わせが多い。また、時には、65歳以上の方と同伴で来る人も見受けられる。

Q 目的である子供世代の来館者が多いことは、若年期における健康づくりの大切さを認知するという意味で大切なことであると思

うが、他にどのような手法により、普及啓発を行っているのか。

A 例えば、広報紙の「健康科学館ニュース」を毎月発行している。一例として、「免疫のことを知ろう」や「女性と健康」、「インフルエンザについて」など様々なテーマを特集して配布している。加えて、ホームページ、地域情報誌、マスコミへの取材等により広報に努めている。

Q 「健康科学館ニュース」は、どのような場所で配布しているのか。

A 市内の小学校146校（市立141校、私立5校）をはじめ、中学校64校、特別支援学校等において配布しており、また保育園（267園）、幼稚園（77園）、認定こども園（53園）では、全園児分の部数を配布している。加えて、区役所や医師会等の協力のもと、配布に努めている。

Q 横浜市においても、子育て支援が喫緊の課題の一つであると認識している。集いの広場などの利用者はどれぐらいなのか。

A 令和3年度実績として、集いの広場は休館日を除き毎日開催し、来場者は2808人となっている。ファミリー・サポート・センターは、会員数3049人の実績であった。

## （2）委員所見

広島市健康づくりセンターにおける事業説明を聴取の後、当該施設を視察した。

館内においては、小さな子供が関心を引くような様々な仕掛けや工夫が感じられた。子供の好奇心は学びの基礎であり、子供の好奇心を体験で刺激していくことは、体験型の学習の一つの特徴であると思慮する。子供にとって、知ることによって世界が広がるということは非常に楽しい経験とされ、その楽しさを発展させることも教育であると言われている。小さな事案であるが、例えば、1枚物の小さなカレンダーにおいて、表面全体には子供が好きな迷路ゲームも印刷されており、デザインにも工夫が感じられるなど、好印象を受けた。

また、夏休み期間のイベントとして、「うんち」をテーマに様々な展示やゲーム等の企画が考案されている。百聞は一見に如かずとの言葉があるが、記憶に残るような楽しい遊びや、体験の場を提供する取組は、高尚な座学よりも一層有用であると感じた。

人生100年時代を迎え、健康寿命を延ばす取組として注目されている。人口減少と少子高齢化が急速に進む日本にとって、65歳以上の高

高齢者人口が最も多くなると推測される2040年をどう乗り越えるかが大きな課題となっている。長寿社会では、医療や介護に依存せず自立して健康的に過ごせる「健康寿命」をいかに延伸するかが焦点となる。そのためには、日頃からの規則正しい食事や運動、社会参加などの生きがいづくりに取り組むことが望ましいとされている。その上で、若い世代からの関わりが極めて重要なテーマでもある。

今回の視察においては、幼少期の子供たちが楽しみながら健康を科学する取組を視察したが、改めて体験学習の有用性を感じた。引き続き、若年層における健康づくりの施策に対するヒントとして生かしていきたい。



(事務所にて事業概要を聴取)



(館内の展示コーナーを体験)